

## 論文内容の要約

論文名	Anatomical Analysis of Human Ligamentum Flavum in the Cervical Spine: Special Consideration to the Attachments, Coverage, and Lateral extent (頸椎における黄色靭帯の解剖学的評価)
氏名	Mohammad Suhrab Rahmani
<p><b>【目的】</b> 超高齢社会を迎え、頸椎後方手術の頻度は増加の一途をたどっている。脊柱管背側に存在する黄色靭帯は、背側から展開時の指標、及び、硬膜に対する保護組織となる一面を持つが、後方要素である椎弓・椎間孔との関係性を評価した報告はない。当研究の目的は、頸椎黄色靭帯の解剖学的形態を脊椎後方要素との関連という視点より明らかにすることである。</p> <p><b>【対象】</b> ホルマリン固定屍体 15 体を対象とした。</p> <p><b>【方法】</b> 全脊椎を一塊にして摘出後に、両側の椎弓根基部を切離して、脊椎前方要素（椎体・横突起など）と後方要素（椎弓根・椎弓・椎間関節・棘突起など）に分割した。椎弓腹側に露出された黄色靭帯に対して鉄粉を塗布し、CT 撮影を行った。得られたデータを基に 3 次元画像の再構築を行い、黄色靭帯の形状、隣接椎弓の被覆範囲、黄色靭帯と椎弓孔や椎間関節の関係性を評価した。</p> <p><b>【結果】</b> 黄色靭帯の形状は、上位頸椎から下位頸椎に進むにつれて縦方向に長くなり、その幅は短縮していた。黄色靭帯の厚みは頭側と尾側では差が無く、一定の厚さを有していた。黄色靭帯による椎弓腹側の被覆は、C2 高位では正中 33%、外側 30%であるのに対して、C6 高位では正中 70%、外側 47%であり、高位が尾側へ下がるにつれて黄色靭帯によって被覆される椎弓面積の割合が広範化していた。また、黄色靭帯に被覆されない椎弓の広さは、高位が下がるにつれて減少した。黄色靭帯は椎間関節関節包の内下方を被覆していたが、椎間孔内の被覆は認められなかった。</p> <p><b>【結論】</b> 本研究結果から、椎弓形成術の骨溝作成は尾側椎弓の下方より開始することで、黄色靭帯が硬膜の保護として働き、安全な術式となると考えられた。また、椎弓孔拡大術を行う際には、黄色靭帯が存在する内上方の椎弓部分より掘削を開始することでより安全な手術操作になると考えた。</p>	